

獨協大学長殿

学外研修報告書

私は、学外研修員として出張しておりましたがこのたび研修を終えて帰任いたしました。
つきましては、次のとおりご報告申し上げます。

報告日	2026 年 7 月 29 日	所 属	外国語学部フランス語学科
職 名	准教授	氏 名	ワイルド 玲奈 
研修種別	1. 海 外 2. 国 内	研修種類	1. 長 期 2. 短 期
研修期間	2024 年 9 月 1 日 ～ 2025 年 9 月 1 日		
学外における主な研修機関および訪問先 イギリス Southampton 大学			
出張目的または研究題目 イギリス公立小学校の EAL 教育が日本の小学校英語教育に与える示唆			
資 格	1. 2024 年度獨協大学学外研修員（派遣） 2. 本学承認の学外研修員（自費等） 3. その他（ ）		
大学から支給された費用（要清算書類）・補助金額 300 万円			
研修内容（1. 研修経過の詳細 2. 研究成果発表の予定 3. その他 を記入）			
1. 研究の目的 日本における小学校英語教育は、平成 29 年告示小学校学習指導要領（文部科学省、2017）に基づき、2020 年度から全面実施され、第 3・4 学年で「外国語活動」が、第 5・6 学年で教科「外国語」が実施されるようになった。この改革の背景には、言語習得に対してより柔軟な早期段階から教育を開始することで、英語運用能力の基礎を育成するという明確な指導目標が存在する。一方、イギリスの公立小学校における、英語を母語としない児童に対する英語教育は、ESL（第二言語としての英語）文脈ではあるが、実践的な英語運用能力の育成を見据えた指導モデルとして、日本の EFL（外国語としての英語）環境における小学校英語教育に対して有益な知見を提供し得る。			

提出先：所属学部長→学長→人事課

裏面につづく

小学校段階における外国語教育を考える上で大事な点は、外国語の実用能力の育成に加えて、それが情操教育に資するものであるべきということである。イギリスの EAL

(English as an Additional Language) 教育は、英語を介した学校生活の適応を第一目標としつつ、その本質は英語を通じて社会を生き抜く「生きる力」の育成であり、その過程における児童の自己肯定感を重視している。一方で、日本の公立小学校教育の根底にも「生きる力」の育成という全人的な教育観が存在する。児童の自己肯定感を指導の主軸に据えるイギリスの EAL 教育の理念は、イギリスの ESL 文脈と日本の EFL 文脈、という違いを超え、日本の小学校において児童が英語学習を通じて自己肯定感を身につけるための参考モデルとなるのではないか。

本研究の目的は、イギリスにおける EAL 教育の特徴を、その教育原則と現地小学校でのインタビューから得られた実証的知見と統合し、日本の小学校英語教育への示唆を考察することである。

2. イギリスの公立小学校の EAL 教育とその特徴

イギリスの公立小学校における EAL 教育は、家庭で英語以外の言語を話す生徒を対象とした英語支援である。EAL は、英語を第 2 言語ではなく追加(Additional)言語と言い表すことで、生徒が既に有している母語や文化的背景を尊重すべき資産として評価し、豊かな多言語話者としての成長を促すという包摂的な姿勢を示している。

イギリスの EAL 教育を理論的・実践的に牽引しているのが、言語教育を通じて社会的排除や不平等の克服を目指す独立系慈善団体のベル財団 (The Bell Foundation) である。同財団は EAL の教育指針として、以下の 5 つを提案している(The Bell Foundation, n.d.)。

①言語資産の活用 (Multilingualism as an asset)

英語だけで話さないとい制限せず、必要に応じて母語で調べたり、翻訳したり、言語を行き来すること (translanguaging) を認め、教科の理解や新しい言語の習得につなげる。

②教育の質の保証と「足場かけ」 (High expectations with appropriate support)

言語習熟度が低いという理由で学習内容のレベルを下げることはしない。学級での支援 (In-class Support) 全ての学級担任教員が EAL 生徒への適切な配慮を行うことが義務づけられており、生徒は通常の授業に参加する。授業内では、EAL 専門教員が学級担任と連携しながら、個別にサポートを提供したり、教材やタスクを調整 (scaffolding: 足場かけ) する。

③内容と言語の統合的指導 (Integrated focus on content and language)

言葉の学習と教科の学習を切り離さず、学級の中で同時に学びを進めることが基本。教室から離れて受けるプルアウト、あるいは取り出し授業は、期間や目的を絞り、所属する学級の授業内容と連動させる。プルアウト (Pull-out) : 児童の英語力が初期の初心者レベルにある場合、特定の授業時間中に通常の学級から離れ、EAL 専門教員から個人または少人数のグループで集中的な基礎英語指導を実施する。

④多面的評価 (Effective and holistic pupil assessment)

英語母語話者向けに設計された読書年齢、言語的推理、綴り、読解力を評価する公式の標準化テストではなく、EAL に関連する評価フレームワークを用いた英語力発達の評価と、各教科における学習の教員評価の両方を含める。

⑤インクルーシブ教育（社会的包摂）(Social inclusion)

EAL 学習者とその家族を学校生活のあらゆる側面に参加・包摂させる。学校は、EAL 学習者が課外活動に参加し、多様な言語グループの友人関係を築けるような包摂的な文化を育む。バディシステム (Buddy System) の導入：学級内で英語が堪能な同級生（可能であれば同じ母国語を共有する児童）を「バディ」として指名して配置し、学校生活における日常的なコミュニケーションを情緒的・実務的にサポートする。

3. イギリス公立小学校における EAL 教育・指導法の調査

3.1 調査の手法と対象校のデータ：

イギリスにおける EAL 教育の実態を定性的に把握するため、一例としてイギリス・ヨーク市に位置する公立スカークロフト小学校に勤務する EAL 教育担当教員を対象としたインタビュー調査を実施した。同校は、全校児童の約 19.3% が少数民族 (BME: Black and Minority Ethnic) のルーツを持ち、全体の約 10.5 から 17.2% が英語を第一言語としない EAL 児童である (Scarcroft Primary School, 2023)。同校の EAL 教育はベル財団の EAL の 5 つの指導原則に沿って実施されている (*English as an Additional Language (EAL) – Scarcroft Primary School*, n.d.)。インタビュー内容は参加者の同意のもと録音され、後に書き起こされた。

3.2 インタビューの内容と分析

インタビューの回答より、5 つの指導原則が実際に以下のように実践されていることが分かった。

①言語資産の活用 (Multilingualism as an asset)

個別の英語指導の中で、「これは自分の言語ではどう呼ぶか」と問いかけるなど、児童が第一言語で学習内容を処理させる時間を取っている。教員は知らない言語であっても児童本人に第一言語の知識を使って理解させる時間を取る。

②教育の質の保証と「足場かけ」 (High expectations with appropriate support)

EAL 専門教員は、プルアウトセッションにおいて、EAL 児童の言語発達の状況を確認して学級担任に知らせ、学級担任は、教室での教科指導の際に EAL 児童に対して授業内容の理解を促進する教材（よりシンプルな言語や視覚教材を含める）を準備して学級内支援を行っている。また、各 EAL 児童に対する週に 20 分間のプルアウトが実践されている。プルアウトでは、一つの教材を長期間使って児童の言語習熟度に応じたレベルの異なるタスクを構成し、工夫して反復活用している。その指導概念は、Krashen (1985) の第二言語習得理論における「インプット仮説(i+1)」の枠組みで説明可能なものである。つまり、児童が理解可能な現在の言語レベルより、わずかに高いレベルの要素を含むインプットを、同一教材を使うことによって既知の文脈を提示し、児童は過度な不安や脅威を抱くことなく、自己肯定感を保ちつつ段階的に英語学習を進める工夫だと考えられる。

③内容と言語の統合的指導(Integrated focus on content and language)

前項の ii. のやり方で、EAL 専門教員と学級担任が連携し、通常の学級の教科内容に関連した児童のレベルに合う英語タスクを CLIL (内容言語統合型学習)

(Coyle et al., 2010) として通常の授業時間内で提供している。これは英語が生活言語である環境への統合を目指す EAL にとっては当然の過程であり、英語の実践的な運用能力を育むという EAL の本質を示すものと言える。

④多面的評価(Effective and holistic pupil assessment)

評価はペーパーテストではなく、ベル財団による 4 技能別の Can-do リストを用いた EAL Assessment Framework の評価ツールを使って運用能力の発達を確認している。

⑤インクルーシブ教育 (社会的包摂) (Social inclusion)

バディシステムは、日常的なサポートを超えて、英語話者のクラスメートがフラッシュカードを用いて EAL 児童に英語を教えるといった、児童相互の学び合い (peer learning) の時間としてシステム化されている。

また、小学校全体の取り組みとして、多文化理解の日が実施されており、各自の文化や異文化の服装で登校する日や、保護者が学級訪問を行い、自己の有する文化を紹介するイベントが実施されている。

4. 日本の小学校英語教育とイギリスの EAL 教育を比較する意義

英語教育としてのイギリスの EAL 教育の中心概念は「内容と言語の統合的指導」とその「足場かけ」である。近年、日本の小学校英語教育においても、CLIL の導入が提唱され (柏木・伊藤, 2020)、実践報告もある (安達ほか, 2020)。しかし、ティームティーチングの授業形態を活用した開始学年の第三学年を含む小学校での実践研究はまだ十分ではない。今後さらなる CLIL の実践方法を考えていく中で、イギリスにおける EAL 専門教員と学級担任の連携という構造を、日本の小学校における ALT と学級担任のティームティーチング体制を使った CLIL 指導の応用することが可能である。前述した EAL の 5 つの指導原則は、日本の小学校における英語教育の実情と親和性が高く、実践的な英語運用能力の育成のための指導に向けた、具体的な実践方法を検討するための枠組みとして扱うことができる。

① 言語資産の活用 (Multilingualism as an asset)

日本の小学校英語教育において学級担任は日本語による指示や補足を適宜行なっているが、このような児童の日本語の力、既有知識 (カタカナ英語の知識など) を否定しないことの意味がより明確になる。CLIL 実践においては、多くの場合児童と母語を共有する日本人教員の日本語使用は重要なサポートとして機能する。

②教育の質の保証と「足場かけ」(High expectations with appropriate support)

日本の現行のカリキュラムでは、自分の身の回りのことについて英語でコミュニケーションを取ることを目標とするコンテンツが主流であるが、CLIL (内容言語統合型学習) を取り入れ、英語そのものではなく、コンテンツを指導する授業を取り入れる。英語の習熟度別の教科書を扱い、タスクの質は下げず、学級担任と ALT が教材と学習活動の調整を行って「足場かけ」を厚くする。

③ 内容と言語の統合的指導 (Integrated focus on content and language)

現在の主流である授業を主導する日本人教員、生きた教材としての ALT という形態から、英語指導と教科指導が連動した CLIL によるティームティーチングに移行する。教科科目の授業内容を英語の授業に組み込む、もしくは教科科目に英語活動を統合する際、教員の教科指導、児童理解の専門性と、ALT 教員の言語的専門性を機能的に融合させることで、英語指導時間の確保し、より実用的な言語習得のための質の高いティーム・ティーチングを実践する。日本人教員(学級担任)は、自校の児童が他教科(理科、社会、図工など)で現在何を学んでいるかを把握している強みを活かし、英語授業に導入する「トピック(内容)」を提案・管理する。教室での役割分担を通して学級内支援とプリアウトを応用する。授業内では、ALT が全体に向けて CLIL 的なインプット(英語のフレーズ練習ではなく、教科科目の内容を使った指導)を行い、日本人教員が学級内支援として、個別のアシストや情意面でのフォローを行い、不安の解消を行う。逆に、習熟度に極端な差がある場合は、授業の一部で ALT が少人数のプリアウト的支援を担当し、集中的な発話機会を創出することも可能となる。CLIL の体系的な実施のためには現場の教員に一任せず、学校、自治体によりカリキュラムが用意され、教員養成が適切に行われることが不可欠である。これまでも、小学校英語教育に際しての学級担任の心理的不安が指摘されているが、指導内容、役割分担の指針がカリキュラムによって用意されることは教員のサポートとして必須である。

④ 多面的評価 (Effective and holistic pupil assessment)

ペーパーテストに偏らない Can-do リストによるパフォーマンス評価を重視する。すでに日本の小学校英語教育において Can-do リストは活用されており、評価にも使用されている。Can-do リストは児童のふりかえりと主体的な取り組みを促す工夫である一方、英語教育を実施する教員側が児童の到達度を知り、次の段階の指導のめあてを考えるための道具としても捉えられている。EAL 教育を参考にした CLIL 授業を実施するにあたっては、英語力の評価と各教科における学習の教員評価も含めて、授業のめあてを考える道具となる。

⑤ インクルーシブ教育 (Social inclusion)

バディシステムは、日本のインターナショナルスクールでも実施されているが、日本の公立小学校においても児童相互の学び合い(peer learning)の時間として導入し、児童が助け合い、認め合うことで自己肯定感を育む学習活動として重点的に CLIL 授業内に組み込む。例えば埼玉県草加市教育委員会は、子ども教育連携推進基本方針に基づき、「自分は大切な存在だ」と思える自己肯定感や、「自分は他人の役に立てる」と思える自己有用感を育む教育を推進している。EAL 教育はまさにこのような教育理念を英語教育を通じて実現するための適切な参照枠となりうる。

5. 今後：草加市公立小学校における英語指導に関する教員インタビュー調査と論文投稿

日本における一例として、埼玉県草加市内の公立小学校において英語の指導を担当する教師(学級担任ならびに ALT 教員)に対してインタビュー調査を実施したものをまとめ、イギリスの EAL 教育の理念および指導法が日本の実際の公立小学校の現場においてどの程度適用可能であるかの考察を加え、小学校英語教育学会誌へ投稿予定である。

参考文献

- 安達理恵・阿部志乃・檜本洋子・北野ゆき・竹田里香・松延亜紀・安田万理. (2020). 「小学校での CLIL 活動実践とその効果」. *JES Journal*, 20, 384–399.
https://doi.org/10.20597/jesjournal.20.01_384
- Coyle, D., Hood, P., & Marsh, D. (2010). *CLIL: Content and Language Integrated Learning*. Cambridge University Press.
- 柏木賀津子・伊藤由紀子. (2020). *小・中学校で取り組むはじめてのCLIL 授業づくり*. 大修館書店.
- Krashen, S. (1985). *The Input Hypothesis: Issues and Implications*. Laredo Publishing Company.
- 文部科学省. (2017). *小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 外国語活動・外国語編*. https://www.mext.go.jp/content/20220614-mxt_kyoiku02-100002607_11.pdf
- Scarcroft Primary School. (n.d.). *English as an additional language (EAL)*.
<https://scarcroftprimaryschool.co.uk/eal/>
- Scarcroft Primary School. (2023, November). *Scarcroft performance data 2022–23*.
<https://scarcroftprimaryschool.co.uk/wp-content/uploads/2023/11/scarcroft-performance-data-2022-23.pdf>
- The Bell Foundation. (n.d.). *Effective teaching of EAL learners*.
<https://www.bell-foundation.org.uk/resources/guidance/classroom-guidance/effective-teaching-of-eal-learners/>